

ChatGPT Work時代の知財戦略

人とAI、専門SaaSが交差する次世代ワークフローの実装

知財AIトランスフォーメーション・プロジェクトチーム

2026年7月

「人が全部書く仕事」からの脱却：Agentic Orchestrationへの移行

【従来】人が全てを書き、調べる

要約・検索・翻訳・作図まで全て手作業

情報が各所に散在し、証跡が弱い



【次世代】人が設計し、AIが形にし、人が責任を取る



1 ChatGPT Workの真価

単なる「回答マシン」ではなく、発明受付から証跡保存までを束ねる横断オーケストレーション層。

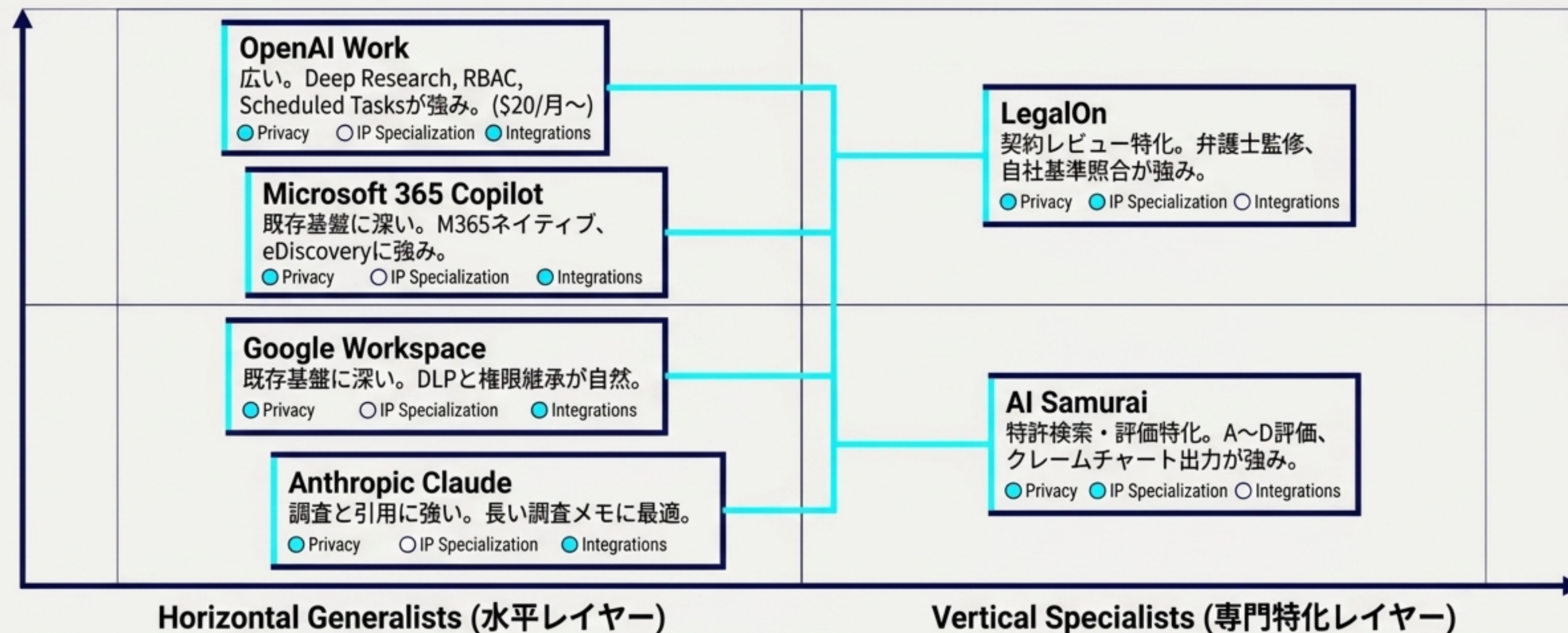
2 法的境界

特許・契約・権利侵害の“最終判断”は、依然として弁理士・弁護士・社内知財責任者の専権業務。

3 最適解

AIを「人を代替する判断装置」ではなく「人の専門判断の前段を厚くする基盤」として配置する。

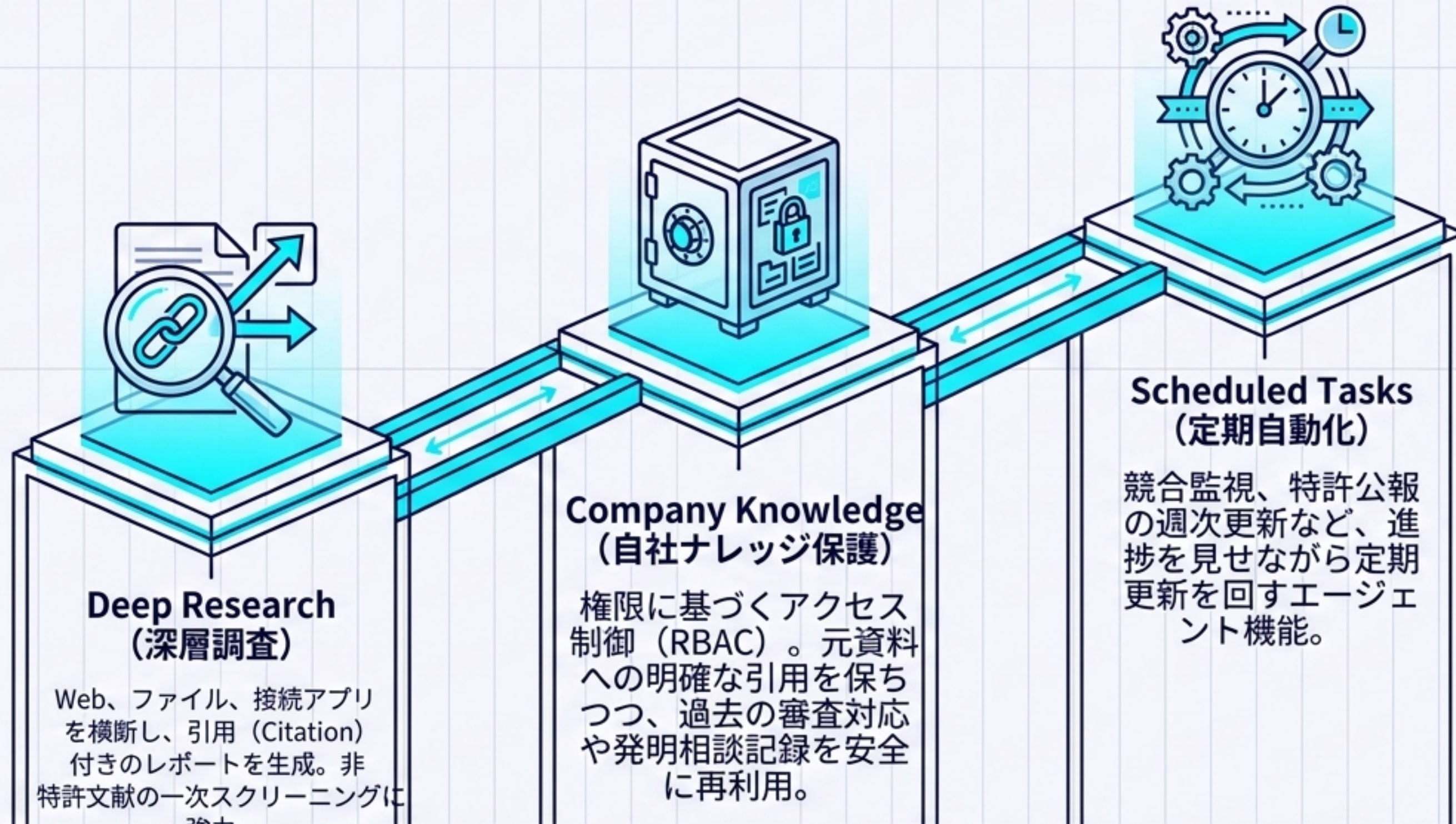
知財AIベンダー・ランドスケープ：汎用と特化の棲み分け



結論

OpenAI Workを“水平レイヤー”に置き、契約や特許の専門工程だけを
専門SaaSへ委譲するアーキテクチャが最も利益を生む。

なぜChatGPT Workなのか？：知財業務を駆動する3つのエンジン

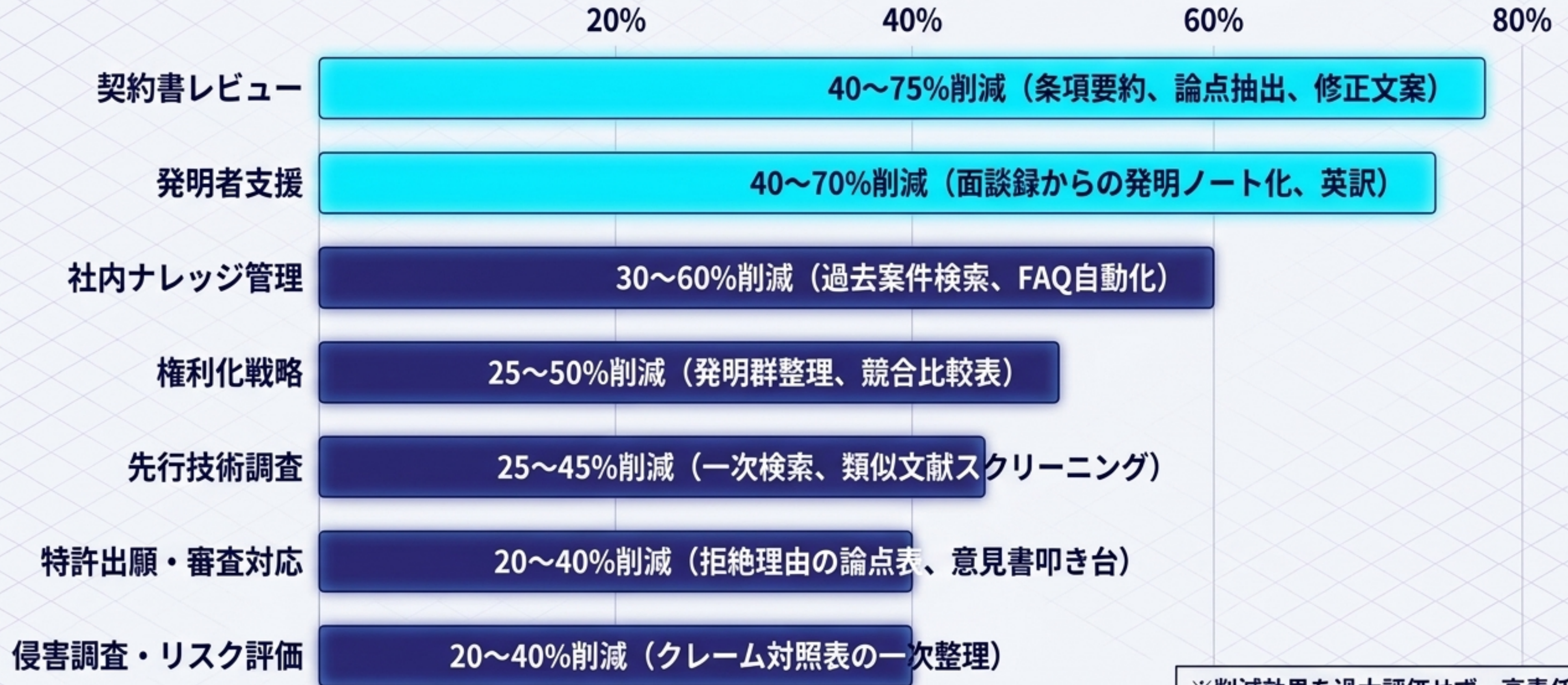


知財AIの「Jagged Frontier（能力の境界線）」



AIの得意領域から外れると性能が急激に落ちる。一次処理の短縮にAIを使い、レビュー密度の増加に「人」の時間を割く安全な設計が必須。

工程別インパクト・ヒートマップ：どこで工数が下がるか



※削減効果を過大評価せず、高責任判断は人が握る前提での現実的推定値。

工程ディープダイブ①：特許出願・審査対応

専門家・人の役割: 請求項表現の最終設計、サポート要件・明確性の詰め、意見書の法的立論。

ChatGPT Work - 散乱情報の構造化

口頭、図面、メールに分散した
「発明面談録」を統合。

明細書の骨子、実施例の候補
を瞬時にドラフト作成。



専門SaaS [AI Samurai等] - 特許特化検証

類似文献のA～D評価。

一致点・相違点の算出と
クレームチャート出力。



失敗の回避: 非特許文献の取りこぼしを防ぐため、公開Webと特許DBを分離する。

工程ディープダイブ②：契約書レビュー

ChatGPT Work

背景整理：案件の背景、交渉論点、
技術側への翻訳、英文要点メモを整理。
知財部が苦手な「社内説明」を代替。

専門SaaS [LegalOn]

法務特化判断：自社プレイブック
の厳密運用、類型別リスク知見、
弁護士監修の修正文言適用。

最大85%の時間短縮
(専門ベンダー公表値)

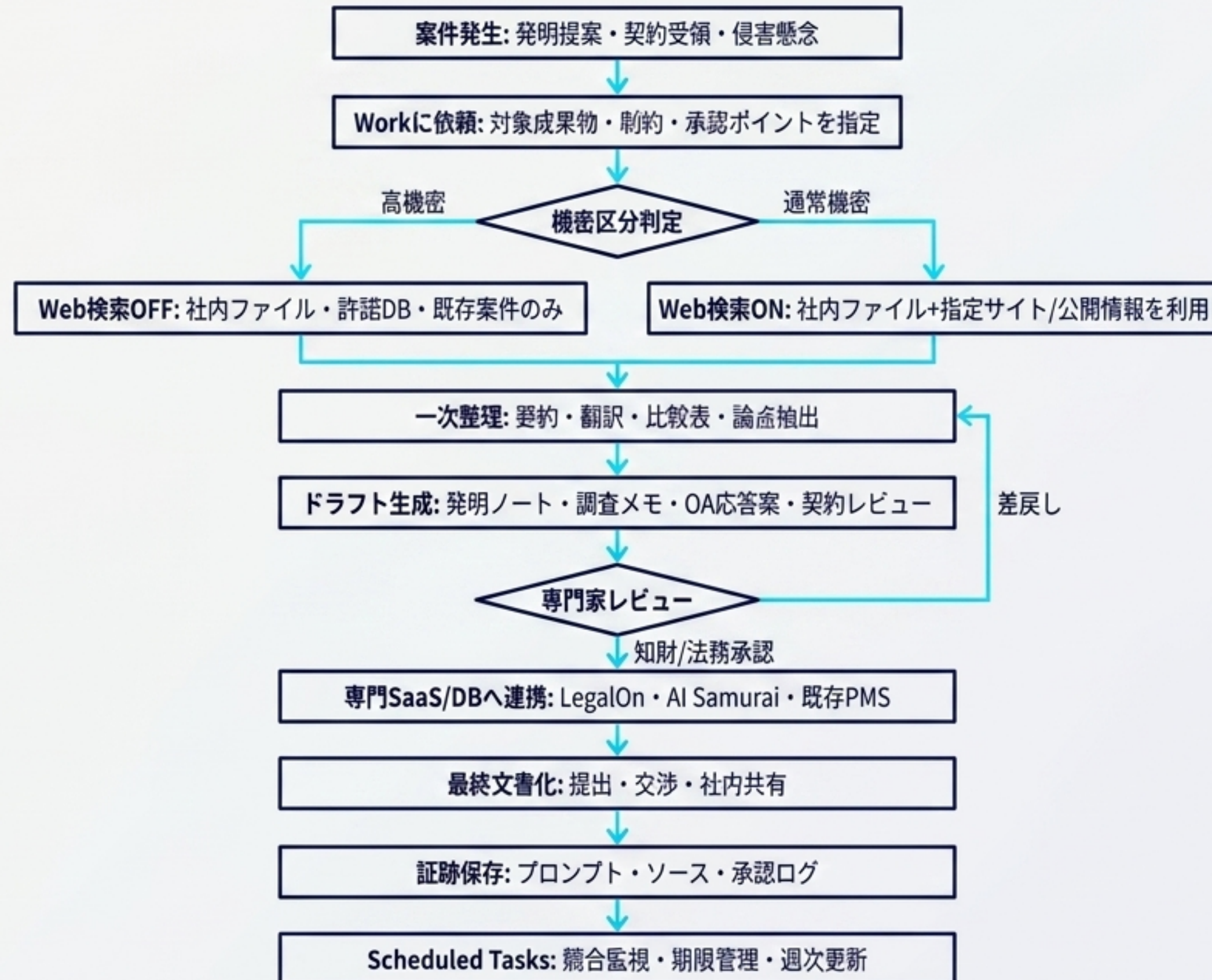


高機密契約ではWeb検索を無効化し、最終赤入れは必ず**専門ツール内**で実施すること。

次世代知財アーキテクチャ：「単独置換」ではなく「ハブ化」



安全な運用を実現する知財ワークフロー・フローチャート



導入を支える法的・コンプライアンスの防壁

非弁・非弁理士リスク

弁護士法72条 / 弁理士法75条：
AIや無資格事業者が実質的な“法的判断”を行うことは違法リスクを伴う。

対策：AIを「判断者」ではなく「支援ツール」とし、最終判断と責任は必ず有資格者・知財責任者が負う運用設計。



特権と証拠保全

Attorney-Client Privilegeの限界：
日本の民事訴訟では米欧型の秘匿特権が全面的には認められない。
「AIに入れたから秘匿される」は誤り。

対策：eDiscovery、リーガルホールドを見据え、プロンプトやログの「証拠保存」を設計する。

営業秘密とデータ保護

不正競争防止法：
秘密管理性・有用性・非公知性の維持。

対策：高機密データ入力時の「Web検索OFF」、ベンダー側での学習不使用契約の徹底。

実装ロードマップ：6～10週間の戦略的PoC



ガバナンスと教育体制：「プロンプト術」より「禁則」を

Top: 管理者・Admin向け

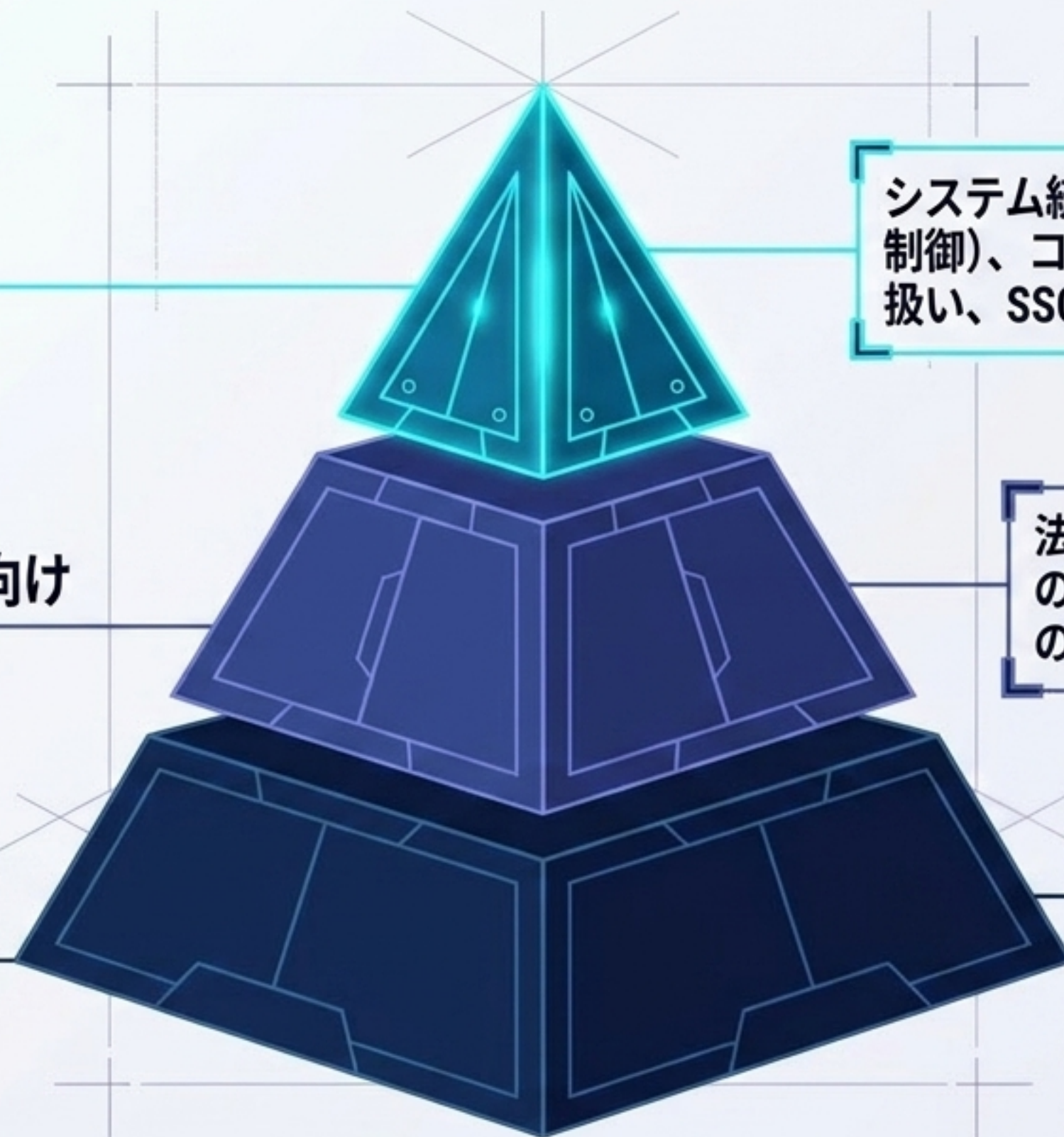
システム統制: RBAC (ロールベースアクセス制御)、コネクタ許可設定、監査ログの取り扱い、SSO/SCIM連携。

Middle: 知財・法務責任者向け

法的リスク管理: 非弁/非弁理士リスクの回避、守秘義務管理、モデル更新時の影響評価。

Base: 全利用者向け

基本ルールと禁則: 入力禁止情報の定義、機密区分、外部送信時の注意、外国語契約・特許特有の落とし穴の理解。



結論：AIは「知財の司令塔」へ、 人は「高付加価値な創造」へ

ChatGPT Workの導入は、
単なるコストカットではありません。

煩雑な一次処理と証跡管理をAIオーケストレーションに委ねることで、
法的責任が重い最終判断や、高度な知財戦略の立案に、
専門家のリソースを集中させるためのアーキテクチャです。

既存基盤・専門SaaS・汎用AIを束ねる「統合設計」こそが、
次世代の知財部門における最大の競争力となる。